

トレイルランニングとは、自然の中を走るスポーツである。自然は楽しさや魅力を提供してくれる一方で、それがリスクにもなりえる。また基本的には占有空間ではない自然の中を走る場合には、他の活動者や自然環境への配慮、安全管理の問題など、他のスポーツにはないリスクも発生する。トレイルランニングを実施する上で、イベント提供者、愛好者ともに、この点をまず自覚することが必要である。

トレイルランニングは、ここ5年ほどで急激に参加者数を伸ばした。それに伴う光と影が存在する。

光の部分としては、トレイルランニング活動の深化、多様化が見られた。国内でのレースが増えたのはもちろん、2007年に鏑木氏がUTMBに参加して以来、日本人が世界の長距離レースに参加することも増え、スポーツツーリズムの欠かせない領域として確立した。日本でも100マイルレースやそれに準じるレースがスタートした。日本山岳協会を初めとした組織設立の動きも見られる。参加者数の増加やそれに伴うメーカーの活動の活発化に伴い、プロフェッショナルとしてトレイルランニングを牽引するリーダーも数多く誕生した。

一方で影の部分も拡大している。山岳遭難統計（警察庁）の元資料には、遭難に至る経緯が記載されているが、平成24-25年には少なくとも8件のトレイルランナーがらみの山岳遭難が発生し、そのほかにも北アルプスでは、トレイルランニングあるいは山岳レース参加希望者が滑落／転落死している。また、環境省や東京都は自然環境におけるトレランに対するルールづくりを進めており、鎌倉では条例制定に向けて陳情が市議会でも可決されている。条例制定の元になったのは、地元の市民団体で、鎌倉周辺におけるトレランイベントやランナーの走り方への日常的な不満が陳情につながったようだ。

こうした影の部分は新たな光にもなる可能性がある。鎌倉での規制の動きに対して、「鎌倉トレラン協議会」が結成され、自主ルールの策定やガイダンスとルールの提案と告知が進められている。また東京都の自然公園利用ルールに関しては、MTB団体であるが、自主的にルールを作成することで、一定の活動の自由度を確立しようとする動きも見られる。環境への影響についても、そのための調査が進むことによって希少種が発見されたり、影響が事実として把握されるなどの副次的効果が見られる。

こうした状況を踏まえ、本発表では、これからの課題として、①自然への影響をどう捉え評価するか、②異なるスピードの活動者がトレイルでどう共存できるか、③ランナーの安全への意識をどう啓発していくか、④トレイルランニングだからできること、イベントだからできることは何か、という4つの問題提起を行った。こうした課題を解決していくことで、トレイルランニングがよりよく発展していくとともに、市民スポーツの新たなモデルとなる可能性も秘めている。